

# 胸をかりる

柳澤 宜勝（新35回生）

わたしが東京から盛岡に住まいを移し、岩

高で高校生時代を過ごしたのは、一六、一七、

一八歳という無謀な、エネルギーに満ちた年齢である。他の同級生たちと同様に、そのようなエネルギーを自分自身もっていることさえ自覚していなかったし、ましてやその表現方法などは考えたこともなかった。当然、今から考えるとハラハラする、うらやましい

人生の数年間を岩高は懐深く受け止めてくれた、と今になって思う。

高校時代は、相撲でいえば幕下の時代である。いつかくる幕内入りを夢みているが（そして自分は当然入れると信じて疑わないのであるが）、自分にその力量があるかどうかの確信はなく、不安とプライドを抱き合わせにもって生きている。そんなときには、日々自分をぶつける相手になってくれる人間がいることが何より必要である。自分を不器用にぶつけてみてはじめて、自分の力も、その生かし方も分かってくるからである。

岩高では同級生たちが、そして恩師たちがそのぶつかる相手になってくれた。あるときは言葉で、あるときは体を張ってその役を引

きうけてくれた、と思う。あの頃の様々な出来事を反芻してみても分かってきたことである。一人前の力士になるにはだれかの胸をかりなければならぬのだ。そして胸をかすことのできるのは、同じ時代に生きた、生身の人間だけである。そしてもしかしたら自分もまた、だれかの相手になって胸をかしていたのかも知れない、と思うとあの時代の仲間たちがむしろように懐かしい。

一年後の実りを望むなら米を植えよ、一〇年後の実りを考えるならば樹を植えよ、一〇年後を考えるならば人を育てよ、という。様々な含蓄のある言葉である。人が育つということを植物になぞられている、というように、人が育つには永い年月がかかる。とい

うことのようにも解釈できる。いずれにしても、岩高の初代鈴木卓苗校長が学校を植物園にたとえ、生徒は植物の幼芽、職員はそれを育てる園丁であり、園丁である職員が十分な肥料を施し、害虫を駆除してやりさえすれば、生徒は各々の個性に応じてすくすくと成長し、花咲かせ実を結ぶようになる、と考えられていたことに呼応していて意味深いものがある。

この精神は、今でも校風として生き生きと続いていくと思う。これを考えるならば、創立七〇年を迎えた岩高の実りは、これからである。今や力士となって世に出た同窓が、胸をかりた思いを有形、無形にかえしつつけるであろう。母校のますますの豊かな発展を期待したい、と思う。